

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

## 日本LD学会会報

第30号



事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184-0015 東京都小金井市貫井北町4-1-1  
TEL. & FAX. 0423-27-2890



## 育つ心と育てる心

目白大学人文学部教授

林 邦 雄

LDの子どもと5年・10年と長くつきあっていると、多くのことを教えられる。その1つに、年少であればあるほど発達に及ぼす影響は障害の方が大きいということがある。発達に偏りのみられるLD児であればこれは当然のことであろう。逆に、中学生や高校生の年齢段階になると環境から受ける影響が鮮明になってくるといえる。この場合の環境とは、主にしつけ・教育を指している。

年少の時期（幼児期）の発達は人の一生のなかでもっとも著しいにもかかわらず、一方で障害のあらわれも顕著なために、子どもの伸びようとする芽を妨げてその芽がなかなか表れてこないものと思われる。ところが、年齢が大きくなっていくに従って、しつけ・教育などの影響がすこしずつすこしずつ効果が出てきて障害の方は軽減したり影を薄め、反対に環境から受ける影響が次第に大きくなってくると考えられる。

以上のことは、幼少のころも年齢が大きくなってからも、発達にとって環境がもっとも大切であるということの意味している。

子どもはそれぞれ育つ心を自己のなかにもっている。育つ心とは自ずから伸びようとする芽である。具体的には友達と遊びたい、家族や周りから認められたい、仲間といっしょにいたい、学校に行きたい、人から愛されまた人を愛したい、など人として当然もつべき欲求である。このような欲求はひとり一人の個性として表れるであろう。

そこでそのひとり一人の個性を育てるのが環境であるといえよう。その大切な環境、良い環境を与えることこそが育てる心なのである。この大切な環境、良い環境とは具体的には、親であり、教師である。このほかに、医師・PT・OT・ST・カウンセラーも含まれるであろう。さらに、直接、間接、子どもをとりまく人々もその一人となる。しかし、育てる心の主役・中心はなんといっても子どもにもっともみじかな親であろう。

育てる心の中心である親は発達の伸びがみられないといって、あきらめないこと、またあせらないこと、そして迷わないで子どもに合ったしつけや教育を一貫してとり続けてほしいものである。